

60周年記念連載②

教育の聖人ペスタロッチと初代校長・成瀬政男

一心を灯す教育とは何か

職業能力開発総合大学校 基盤整備センター 多々良 敏也

作成支援：GPT-5（生成 AI）

校長が残した「静かな問い」

私たちの大学校の初代校長・成瀬政男氏は、教育者としての誇りと謙虚さを併せ持った人物であった。

彼は45年間にわたり、約2万3,000人もの学生・生徒を教えた。だがその長い教師生活の終盤、自著『こころの住みか』の中で、次のような問いを自らに投げかけている。

「これらの学生生徒に、わたくしは、わたくしのこころを、どのくらい届けえたのであろうか。」

氏は、冷静に「心が届いた人数」を計算する。もし1万人に1人なら2人、1,000人に1人なら23人。その平均をとれば、約12人――。

45年という歳月の果てに残った数字は、意外なほど小さい。だが、成瀬氏はそこに失望ではなく、静かな納得を見いだす。

「もし、十二人の中に、わたくしのこころの住みかがあったなら、それで十分である。」

この「十二人の教育」という表現には、教育の本質を射抜くような洞察が宿っている。教育とは大量の知識を伝えることではなく、誰か一人の心に“住み家”を築く営みなのだ――。その姿勢は、まさに「技の伝承」にも通じる精神である。技能形成の現

場においても、深く通じ合えた数人の弟子との関係が、後に大きな潮流を生み出すことがある。数ではなく、深さ。それが教育の根幹にある真実だと、成瀬氏は教えてくれる。

教育の聖人ペスタロッチの「失敗からの出発」

この成瀬氏の思索は、200年前のスイスに生きた「教育の聖人」ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチの歩みと不思議な共鳴を見せる。

ペスタロッチと聞けば、教育史上の偉人、あるいは理想的な教育実践者を思い浮かべるかもしれない。しかし、彼の人生は驚くほどの失敗の連続だった。

若き日、牧師を志して神学を学んだが、社会改革への情熱から法学学へ転向。やがてその急進的思想が「危険人物」と見なされ、公職への道を閉ざされる。

その後、農民として理想の共同体をつくろうとしたが、経営に失敗して破産。続いて工業経営にも挑むが、これもまた失敗に終わる。借金は4万フラン。すべてを失った。

しかし、そのどれもが無謀な夢想ではなかった。ペスタロッチは「食・衣・住」という人間の生活を支える根幹を、教育と結びつけて考えていた。農業

は食を、工業は衣と住を支える。彼の構想は、教育と技能を通じて人々の生活を再建するという壮大な社会的ビジョンであった。

つまり、彼の“失敗”は、教育を単なる学校の枠に閉じ込めず、人間の生き方そのものとして構想した挑戦の記録だったのだ。

混沌のなかに生まれた「愛の教育」

ペスタロッチの教育思想が真に形を成したのは、静かな書齋ではない。戦争孤児50人をたった一人で世話した、シュタンツの孤児院という極限の現場だった。

彼はその体験を、友人への手紙にこう綴っている。「私の涙は彼らの涙とともに流れた。私の微笑は彼らの微笑とともに頬にのぼった。彼らの食べるスープは私のスープであった。彼らが病むときは、私は彼らのそばにいた。」

この手紙から伝わってくるのは、教育の原点が“知識の伝達”ではなく、“生きる苦しみを共にすること”にあるという感覚である。

愛とは、理論ではなく共有の実践なのだ。

成瀬氏が生涯語り続けた「心を届ける教育」は、まさにこのペスタロッチの実践と重なる。机上の理論ではなく、学ぶ者と教える者が互いの存在を通じて成長していく関係性——そこに教育の根がある。

「頭・心・手」のハーモニー

ペスタロッチの教育の核心は、「頭（知）・心・手（技）」の調和にある。

彼は、人間形成のためには次の三つが不可欠だと考えた。

1. 頭（知）の教育 — 体験を通して得た感覚を言葉で整理し、概念として理解すること。
2. 心の教育 — 愛と道徳を、生活の中で身をもって学ぶこと。
3. 手（技）の教育 — 技術や技能を通じて、思考を具体的な行動に結びつけること。

この三位一体の思想は、まさに職業能力開発の理念と響き合う。

技能の習得は、単に手を動かすだけでは成立しない。理論の理解（知）と倫理的責任感（心）があつて初めて、技が人間的価値を帯びる。

そして成瀬氏は、その三要素を体現する教師であった。講義では理論を重んじつつ、学生には「技術は人を支えるためにある」と語り、日々の生活を通じて教育者の“背中”を見せ続けた。

成瀬校長が残した光

今、生成 AI やデジタル技術が教育や訓練のあり方を大きく変えようとしている。

しかし、その変化の中でなお、「心を届ける教育」という成瀬氏の問いは色あせない。

技術が進んでも、人を育てる本質は変わらない。それは、ペスタロッチから成瀬氏へ、そして私たちへとつながる教育者の静かな系譜なのかもしれない。

私たちはこの系譜の先に立ち、次の世代にどんな光を渡せるだろうか。

成瀬校長が見つめた「12人の心」のように、一人ひとりの学びの中に確かな温もりを残せるよう、日々の実践を重ねていきたいと思う。

〈参考文献〉

- [1] 成瀬政男, 「ペスタロッチの言葉 —もう一つの世界—」, 技能と技術, 1970年6号.
- [2] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(1)」, 技能と技術, 1973年1号.
- [3] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(2)」, 技能と技術, 1973年2号.
- [4] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(3)」, 技能と技術, 1973年3号.
- [5] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(4)」, 技能と技術, 1973年4号.
- [6] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(5)」, 技能と技術, 1973年5号.
- [7] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(6)」, 技能と技術, 1973年6号.
- [8] 成瀬政男, 「ペスタロッチ略伝(7)」, 技能と技術, 1974年1号.
- [9] 成瀬政男, 「所感「こころの住みか」」, 二級技能士訓練課程通信講座 会報 第16号, 1971年1月1日.